

せたかむい

発行・古平町史編集室
古平町文化会館
第169号・平成15年10月1日
12590

年表で読む

古平の歴史

《75》

学校教育

■独立校への陳情

鴨居木から泥の木方面の開墾が盛んになり、水田への転換が進むようになると農業人口も増え、それに伴って就学児童数も多くなってきた。

大正七年には男子三六人・女子二九人、計六五人を数えるようになり、開校から七年で約二倍にもなっていた。

大正八年のこと、部落の代表から次のような陳情書が町会（町議）に提出された。

「この部落の鴨居木特別教授所は明治四三年九月二五日に創立され、明年をもって一〇周年になろうとしている。顧みれば当時の児童数は三〇余人であったが、年ごとに増加し、今は七〇

人を数えるようになり、更にこの地域の人口も年々増え続け、前途ますます発展するものと思

われる。従つて児童数もこれ以上増加すると考えられる。聞くところによると、群来小学校は在学する児童数は四〇人程なのに、尋常小学校として独立している。それなのにこちらは未だに特別教授所のままである。同じ義務教育の学校であつてこのように名称が違うということ

は、ややもすれば、世間では両者の軽重を疑い、或は教育の普及を阻害するおそれがないとは言えない。大正六年に発せられた北海道庁の初等教育制度により、すでに各地では尋常小学校に変更されているのに、ここは依然として教授所のままである

のは甚だ遺憾なことである。ついては、来年一〇周年を迎えるのを機に、大正九年度から独立した尋常小学校に変更されるよう、部落民一同の希望であることを陳情いたします。」

大正八年十一月五日

佐藤吉助 工藤富五郎

木村長之助 金沢金之助

上野善五郎 依田七五郎

齊藤岩藏

これに対して、町会から次のような答申書が出された。

「先の陳情について審議したが、町としては外にも緊急に施設をしなければならぬ事業もひかえているので、町財政に多少の余裕が出来るまで、これを延期することに決定した」

■鴨居木分教場となる

大正九年九月二五日、学校や地域を挙げて開校十周年記念を祝い、部落からは贈与版一式が記念として贈られた。

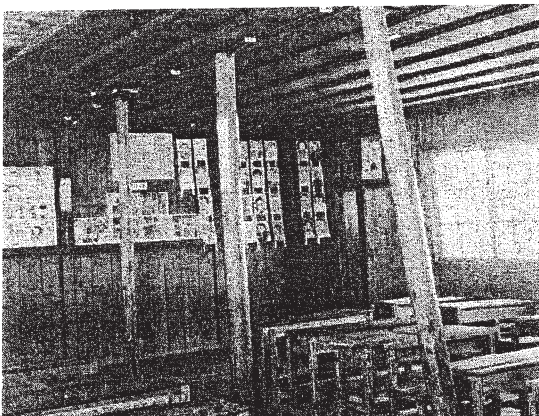
部落からは小学校への昇格の陳情もあったが、大正一二年四月一日、古平尋常高等小学校鴨居木分教場と改称した。

開校以来の就学児童数はさら

に増え、男子三四名・女子二九名で計六三名を数え、教室を増築しなければならなくなり、部落では土地を買収して町へ寄付をした。同年七月、本校の古い校舎の一教室分を移築して、工費約四五〇円で増築校舎が落成した。これを記念し、高野常吉外六人から教室用に掛時計一個が寄贈された。

大正一三年、隣家から出火して類焼の危険があったが、部落民の消火作業により火災から免れることができた。

←明和小学校校時代教室



大正一一年

▼八月二五日

長らくの雨も今日は快晴になった。しかし海は珍しく時化だ。リングは全国的には豊作ということで売れ行きは悪く、小樽方面からの買人もさっぱり来ない。今日までに六〇円程売った。郵便局問題のことで印をもらうことになったが、一条部落会では一〇人の役員の内、四人よりは陳情書への押印がないのでは困る。鉄道問題はいいよ目鼻がつき来たる二六日、鉄道省から技師が出張する旨の入電があり、二八日には到着するとのこと。明日、そのことについての相談があるという。

▼八月二六日

起床六時 近頃になく早起き。運動をかねて浜を散歩する。昨日の時化に引きかえ今日は快晴上ナギだ。今の浜では「正大謀」の若い者が投網の準備中だ。まだ一か統も投網していない。新築中の学校校舎を見に行く。大工や出面の人達が一生懸命に工事をやっている。竣工の上は立派なものになるだろう。大雨後

の朝夕の涼しさ初秋の感があり、単衣一枚では寒いくらいだ。去る二日、小樽、鳥羽さんへお願いしていた校門の寄付金二円、今日受け取ったありがたい。お陰で三〇円を超えたのは喜ばしい。

▼八月二七日

起床七時、朝食前に浜を散歩する。朝夕が涼しく初秋らしい。勇丸が小樽へ行くというので、

高野名幸作さんの日記から

当時の世相を見る

【70】

小樽、岡崎へ五八号一箱送った。午後二時から信用組合で木材会社の総会がある。一割程の配当があった。明日、鉄道省の技師が来町するというので、町長や困主人、外数人が余市まで出迎えに行く。夜、床屋に行つてから湯に入る。

▼八月二八日

起床六時、この頃は余程しのぎやすい。浜辺を散歩すれば吹く風もさわやかで心地よい。鉄道省の技師が来町するというので、出迎えの準備を予定していたところ、余市から陸行するこ

とに変更された。八、大謀からアバ繩上等の問い合わせがある。こちらで考えていた思惑通りになってきた。こんな時こそ大いに馬力をかけ勉強して、今後に備えねばならぬ。店は閑散。

▼八月二九日

今晩二時頃、突然の豪雨となり六時頃まで続く。起床後、浜に

出て見る。川尻では大水が出たというので騒いでいる。土場付近では水が出て家財道具など運び出している。港町では竹内さんの裏山が崩れて家が破損したが、幸い人には被害が無かったとのこと。雨は八時頃になってようやく晴れた。鉄道省の技師一行が余市から陸行したとの電話があり、関係者が一時頃沖村まで出迎えに出る。五〇余人が出た。沖村の田岸で休み、四〇分程で一行が到着した。夜、歓迎会

がある。

▼八月三〇日

起床六時、朝夕は涼しく初秋らしい気分になった。鉄道省の技師一行は今朝早々に出発した。町長、困主人等が余市まで見送りする。午前中、浜町方面の掛け取りをする。午後から新地方面を廻る。

▼八月三一日

月末だが掛け取りの方は一向にはかどらない。店も閑散としていて一般に不況だ。夜八時半頃、突然、電灯が消え大騒ぎだ。ローソクやランプを買いに来る人がいる。ついに朝までつかなくった。新聞によれば山方面の水害は三年ぶりの大洪水で被害も甚だしく、惨状を極めてい

るとのことだ。

▼九月一日

朝夕が涼しく初秋らしい。朝の間は小雨が降っていたが午後から快晴になった。八反田へ一四号一五〇〇斤、一斤四錢三厘で売却した。午後から出面三人と熊さんでリングもぎをする。私は板倉でリング売りに当たる。六円程売る。夕方から海が時化ってきた。コーロギの声も秋

らしい。

▼九月二日

新聞によれば、軍艦新高が去る八月二六日、カムチャツカ沿岸で大暴風のため沈没し、乗組員三三〇人のうち助かったのは僅かに一六人で、あとは溺死したとのこと。実に近年にない大惨事だ。

▼九月三日

毎日毎日よく雨の降ることだ。家の子供たちはこの雨の中でも、引き綱やらバケツを持って、近所の子供たちといっしょに魚すくいに行っている。こんな時代が一番楽しいものだ。困の末子さんが急に悪くなったというので、八時頃行く。㊦、㊧、㊨の主人等と一〇時過ぎまでいる。

▼九月四日

朝から雨が降る。先月二三日から雨の降り続くこと甚だし。今日の蒸し暑いこと、また暑さが戻ってきたようだ。昨日までセルの単衣(ひとえ)でいたが今日は白地を着る。雨は一日中降り続き道路の悪いこと。春先の雪解け時のようだ。沖村大謀へ並アバ縄四〇丸現金売りする。

余市、美国方面の大謀はマグロ大漁とのこと。中でも美国赤岩の大謀では、去る三〇日の建て込みから四、五日で一万三千元も水揚げしたとは驚きだ。

▼九月五日

起床七時 今日朝から大雨が降り出して止まぬ。吉村大工が来て、二階のガラス窓の修理をする。午後からは雨も少し止んできたが、ずいぶんと涼しくなった。昨日は七八度F(二五度C)ぐらいあったが、今夜は六八度F(二〇度C)まで下がり、少しはしのぎやすくなった。聞けば昨晩から今晩にかけて美国、積丹辺りでは大水が出て大騒ぎになり、被害も出たという。この分だと外の地方でも被害があるだろう。海も時化てきて帆船二隻が避難している。家にも波の音がゴーゴーと聞こえる。

▼九月六日

起床七時 朝夕は涼しく、そして日も短くなってきた。これからは一日増しに秋らしくなり寒くなるのだ。店は閑散、リンゴ買いはさっぱりない。来たる一〇日、小樽に軍艦四〇隻余りが入

港するといふので、少しはリンゴ景気があると思つたが、こんな年もない。これからはリンゴ栽培を断念するところも出てくるかも知れない。支店の末子さんが危篤だといふので妻が行つたが、お昼頃亡くなった。まだ二歳でこれからだといふのに、惜しむべしだ。父もすぐにお悔やみに行つた。

▼九月七日

朝夕は涼しく心地よい季節となつた。昨晩一〇時頃余市から電話があり、㊦高森さん余市まで来たとのこと。実に突然のことと意外であつた。今朝一時の汽船で来たとのことである。熊さんは農園行き、カラス駆除の許可書がようやく下付されたので、明日からでも発砲するつもりだ。今晩は妻、父が支店の通夜に行く。明日も通夜で、明後日九時に葬式をするとのことだ。

▼九月八日

起床七時 支店へ手伝いに行く。店は閑散、一四号は出盛りになつたが、一斤三錢五厘といふから実にイヤになる。袋掛けなどずいぶん高い出面でやつた

が、この値段では損が出る。富丸で小樽から岡崎さん等が支店の葬式に来られた。

▼九月九日

起床七時 今日支店の葬式当日だ。私も八時頃行く。九時半読経。一〇時出棺。見送り人も沢山いる。花輪も沢山あり、近年にないりつばな葬式だ。二一歳を一期として逝かれたのは実に惜しいことだ。父母、遺族の身にとつては悲しみも計り知れないが、名残りも惜しいことだろう。葬式から帰るとセ梅野の三十三回忌がありお詣りに行く。

▼九月一〇日

起床七時 農園へ行き、小樽へ送る一四号などをむ。岡崎さんは朝の船で帰るといふので、大急ぎで戻り見送りする。小樽へは今朝、連合艦隊の四五隻の大艦隊が入港し壮観を極めたとのこと。しかし、今年は夏に東宮殿下のお出でがあり、三年前にも大艦隊の来航があつたばかりなので、たいていの人は見物したのか、今回はあまり騒がないようだ。午後二時の外浜丸でも帰られる人がいるので、浜まで見送りをする。

ハ続くV



敬老の日

大澤 文子



炎暑というほどのこともなかったのに……秋は一人前にやってくる。だが別に物悲しいと思ふこともない。

ゆふすれば大根の葉に降る時雨いたく寂しく降りにけるかも
(斉藤茂吉)

ふつと歌人斉藤茂吉氏の作品を思い出した。「いいなアー」そんな思いに耽っていた私は、なんとという事もなく本棚の中から昭和五十年頃の朱い表紙のアルバムをとり出していた。

若かりし頃の想い出のかずかず。九月頃のページを捲っていた。ああ敬老の日の写真が……思わずくぎづけさせられたような何ページか。

文化会館の「太陽の間」の壇上高くかけられた日の丸と古平町章の旗。その旗を背に写された敬老の日のみなさま方。緊張された米寿・喜寿のみなさまの顔！ 顔！

あの頃、何年か連合婦人会長を任命されていた私も、町議会議長張江芳満様と町長逢見輝重様の中に写っていた。ウワァ！ なつかしい。

招待を受けられた沢江町のあの方……新地町のあの方。浜町、沖町のあの方も……みんな懐かしいお顔。

時間をかけて確かめ、ひととき楽しい思いにかられた。そして考えた。

逢見町長様、張江議長様のご挨拶に次いで、私も壇上に立つてお話をしたつけ……と。何をお話したかなア。

ああやつぱり。あの頃、八十九歳になつても元気だった父の一日の行動を、皆さんにお話したことを思い出した。

父は物理学の教師を退職後、札幌市南十条西十二丁目に住んでいたが、母が亡くなつてからは必ず午後になると外出。雨が

降つても照つても街へ出かけてゆくという。

あとから聞いた話だが、外出先は先ずデパートへ、孫達の（私の子供達）お菓子など求め、のち狸小路のビヤホールへ出かけてゆくという。

父をよく知っているお店のご主人は大変よくして下さり、テーブルの一個所を「今井先生の席」として特別きめて下さつたという。

父はお店のご主人、または客達と雑談を交わし、ビール一杯の楽しみをもち、夕方、タクシーで帰るという。

何年間か続いた父の日課であつたろう。

また、父の持論とは「葉書ほど安いものはない。便利で楽しいものはない——」このことである。

いつか藤浦洸氏がハガキについて言われていたが、

「つまり掌(たなこ)に書く小説、ごく短い小説ということであらう。それはそれなりに味わいのでてくるもので『葉書文学』とでも言おうか……」と。ハガキであれば五分位でも気

楽に書ける。普通の文字より幾分大きく字数の少ないほど楽しいもの。こまめに文字を書くということは、老化現象の防御にもなろうと言えよう。

父の家によく教え子達が集まる。楽しみの一つであらう。教え子達が帰つてゆくと、翌日にはもうハガキにむかい礼状をかいているという。

私も毎月一度は父を訪ねることにしているが、必ずといっていい程書斎で書きものをしていく。私はいつもその背にむかい挨拶をするのが常だった。厳しく生きてきた父の尊い性格だったのであらう。

こんなことを、私は敬老の日のご挨拶がわりにお話したくなアと思った。

そしてお話す私にむかつて、ひとつひとつ頷いて真剣に聞いて下さつたみな様方のお顔を、いつもいつも忘れることはない。

※訂正のお詫び

先月号で、終わりの八行分をダブって印刷してしまいました。見苦しい点がありましたことをお詫びいたします。

中 弾 泣 き 笑 い の
樺太 漁 場 体 験 記
戦 後 弾 戦 対

吉 野 慶 一 郎

終戦の日 終戦の落日に悲
の浜辺で しい思いを抱き
ましたが、その時、浜辺に人影
が集まり、火を焚いているのを
見てそこへ行って見ました。寄
って行って見ると、それは今
朝、招魂祭でいっしょだった在
郷軍人分会の幹部の人たちでし
た。明日にも、ソ連軍が進駐し
て来るかも知れないという緊迫
した状況になったので、それに
備えて軍関係の証拠品を廃棄す
るため、まず重要書類を燃や
し、これまで軍人分会の象徴と
もいふべき、旭日輝く分会旗を
燃やしているところでした。分
會長以下、挙手の礼でその炎を
見つめている胸中如何ばかりか
と推察し、自然に涙がこぼれ落
ちてきました。見てはならない
ものを見たという思いは、いつ

そう敗戦の厳しい悲惨な現実
が、身に迫ってくるのを覚悟し
なければなりませんでした。
空も海も山も何事もなかった
ように、静かなもとの姿に戻っ
ていました。日はまた昇る、し
かし、明日の太陽はどんな光を
私たちに投げ与えてくれるの
か。樺太特有の、何時までも暮
れ切らない白夜の薄明かりの浜
から、わが家に向かう頃は暗
く、その足取りの重かったこと
を今でも覚えています。

このようにして、終戦の日の
樺太の夏の長い一日が終わりま
した。

敗戦を現実 敗戦の心の痛
にして恐怖 みの癒されな
いまま寝苦しい一夜が開けて、
翌一六日を迎えました。

この日も朝から快晴、ところ

が前日のあの猛暑はうそのよう
に影をひそめて、昨日のことは
何も知らぬとばかりの涼しい風
が頬をなで、赤トンボが飛び交
って、さわやかな初秋の気配に
変わっているのです。

「昨日一日のことすべてが夢で
であってほしい」と、あきらめ
切れない未練心をさらに引き出
すような、余りにも穏やかな風
景をかえって恨めしく思う程で
した。

その時です。突然上空に飛行
機の爆音がしました。もしや日
本の飛行機かと期待したもの
の、今まででさえ一度も飛来し
たことがないのに、終戦になっ
たいま来るはずはない、やはり
憎らしいソ連機です。すわッ空
襲か、身を隠しましたが攻撃し
て来るようなことはなく、ただ
低空を旋回し、あたかも「今日
から樺太はソ連になったのだゾ
ッ」と、あざ笑うかのように悠
々と、しかも不気味さを残して
飛び去って行きました。

招かざる客、ソ連からのどん
だ訪問者に、敗戦の真実と、こ
れからのソ連軍進駐の恐怖を改

めて思い知らされのです。

蓄えた命の綱 ソ連軍がい
の荷物も失う つどのよう
な形で進駐して来るにしても、
その時の準備と心構えだけは必
要と考え、取りあえず家の内外
を片付けることにして、家族一
同また忙しく動くことになりま
した。

私は一週間前ソ連が参戦した
日に、ここなら空襲を受けた時
でも安地帯だと聞いて、少し離
れた知人の漁場に預かっていた
物を引き取りに行きました。

ところがそこには全く人影も
無く、家も倉庫も空き家とな
り、荷物らしいものはほとんど
ありませんでした。前浜には発
動機船の姿も見えないのは、昨
日の終戦の放送を聞いて、急に
船で北海道へでも脱出したもの
と推察しました。それにしても
機敏な決断と勇氣にただ圧倒さ
れるばかりでした。

私は、今となつては航海の安
全を祈るばかりです。預かった
荷物は戦中の最後の場合を予想
して、命の綱としての米・みそ
の食料品と衣類でした。(続く)

吉平いろはうた

もう一度 逢ってみたいな羅漢さん ②

□画家・林竹次郎

五百羅漢図の作成を、当時、札幌一中（現在の札幌南高校）の図画の教師であった、林竹次郎に依頼した経過は全くわからない。

寄進した種田富太郎は北海道内でも有数の漁業家でもあり、また、のちに道会議員に初当選するなど多くの人脈があり、美術界の関係者からの推薦があったのかもしれない。

林竹次郎は明治四〇年、すでに『朝の祈り』という作品が第一回文部省美術展（文展）に入選している。

一般的に林竹次郎の画風は、地味であるが、構図や色彩配合の落ち着いた、またしっかりと描写技術が身についた努力型の絵と言われている。しかし、竹次郎自身は、



「自分の絵は近代的魅力に欠けている」ということを常々言っていたそうである。

しかし、林竹次郎は教師として、またグループを結成して多くの優れた作家を育て、その中の一人に三岸好太郎がおり、道内の美術教育や美術界にも大きな業績を残している。

昭和49年7月から20日間にわたって、道立美術館（現在の道立近代美術館）で、『林竹治郎 五百羅漢像第一号』

「大正9年4月・大作第一筆」とある。禅源寺玄関に掲示

展』が開かれたことがある。

□五百羅漢の制作

五百羅漢の制作にとりかかってみてそれは大仕事であった。まず、モデルには家族はもちろん、生徒や訪問者、新聞の写真なども素材とした。

描き始めてから二百枚くらいまでは順調に進んだようだったが、それからは壁につき当たり、竹次郎は次男を撮影係に従え、九州から京都、奈良方面の寺院にある五百羅漢や仏画の視察にも出掛けたりした。

キリスト教徒であった竹次郎は「神は何億という人をみな連れて造られたのに、おれは百か二百でなぜ行き詰まるのか」と、嘆いたことも一度や二度ではなかったという。

モデルになった有名人としては犬養毅（総理大臣・高橋是清（同）・田中義一（同）宇垣一成（陸軍大将）などがあり、中に自画像もあるという。

当時、モデルになったというひとりの中学生は、次のように同窓会報に書いている。

「私も炎天下の庭に立たされ、

身動きもせずモデルにされ、しかも紅顔の美少年？を前にして、カンバスに描かれているのは白髪の老僧でしたから嫌になったものです」

五百羅漢像第一号の裏面には「大正九年四月・大作第一筆」と記されている。四〇点程見たが、これらにはすべて制作年月があつたが全部の絵については確かめていない。また、有名人でモデルになった人についてはその名前が記されている、と聞いたことがあつたが、この中には見当たらなかった。

当初、竹次郎は絵が完成したら札幌公会堂で展示会を開きたいと、種田富太郎とも合意していたが大量の油絵の保管場所もなく、制作にも年月がかかったことから、種田家の経営する自動車運送部のトラックやフォード車で札幌から運び、一時種田家の倉庫に運び入れ、それから禅源寺に運んで順次展示した。

当時の新聞には、

「相手嫌わず羅漢にする——林画伯が八年の精進、油絵で行く五百羅漢」

という大きな見出しで、アトリエにうず積まれた完成・未完成の五百羅漢像の中で、制作中の竹次郎の姿が報道されていた。

林竹次郎画伯の肖像
教師をしていたときのあだ名が「ヤギさん」で、そのひげがトレードマークであった



一人の額が四七五枚、五人の大額が五枚の計四八〇枚あり、五人の絵については、当時の美術学校榎木校長から構図の助言を受けたと言われている。

額は札幌市狸小路の大観堂から、一人額は一〇円、大額が二五円で納入された。

五百羅漢像の完成には大正九年から昭和一四年まで、実に二〇年に及ぶ歳月が流れている。

竹次郎は五百羅漢像の完成をみた昭和一四年、長らく住み慣れた札幌の地を離れて、次男文雄の住む鹿児島へ移ることになり、それを記念して今井デパートで個展を開いた。

鹿児島に移り住んでからも、朝鮮や沖縄を巡って絵を描いていたが、札幌で発病したとされ眼の腫瘍が頭部のリンパ腺に転移して悪化し、昭和一六年三月に死去した。

□人気の五百羅漢

全国で一〇か所以上の寺院で五百羅漢図や彫像があるようだが、道内では小樽宗円寺の木像がよく知られている。

禅源寺の五百羅漢の特徴は、仏画としては珍しく油彩で描かれていること、また、画家がクリスチャンであることで、しかもこのような四八〇枚にも及ぶ大作はほかには無い。

また竹次郎は、大事業である宗旨違いの仏教画・五百羅漢像を描くに当たって、この方面に造詣の深い美術学校大村西崖教授の『国釈大蔵経』を読み、仏教の根本教義を研究したことも

知られている。

羅漢像の構想としてその姿からいくつかに分け、その背景には経文や熱帯植物、インドの建物などを描き、それぞれに老若の区別をつけるようにした。

しかし、何と言っても阿羅漢（仏教の最高の悟りに達した聖者、五百羅漢はその境地に達した五百人の釈迦の弟子）の風貌と、その姿態を考えるのに困難が多かったようである。

こんな作者の制作意図を考えながら五百羅漢図を見ると、また理解の仕方が違ってくるかも知れない。

現在では宗教の枠を超えた美術品として愛好され、鑑賞されている。

観光シーズンには禅源寺の五百羅漢像の拝観者も多いが、本堂を取り囲むその異様な雰囲気は圧倒されるようである。

五百羅漢像には、自分の知っている人とよく似ている人が三人いると、誰言うことなく言い伝えられている。そこでこんな川柳がある。

五百羅漢の一人ひとりと

逢っている

額の中の一人一人の顔を見ていると、その中には自分にとって懐かしい人、忘れられない顔がある。そんな思い出にひたっていると時間なんかすぐに過ぎてしまう。

しかし、なかにはこんな人もいるかも知れませんネー。
五百羅漢を通りぬけては
疲れきる

似たような顔はあったものの、中にはそれがあまりいい思い出ではない顔もある。意地悪だった人、威張ってばかりいた人、ずるかった人などなど……。そんなイヤな顔を思い出しながら見ていたら、ほんとに疲れてしまっだらうナー？ そんな思いのする一句である。



札幌通信・第10信

新大議員奮戦記

吉 川 義 雄

役場吏員も、二年を経験すると自分の好きなように振る舞うし、二十七歳の若いエネルギー全開中の目には、横着としか映らない町会議員の攻撃に向けられ始めていた。

庶務係は議会事務局も兼ねているから、議会招集から始まる一切の業務を担当する。

時間がきても誰一人集まらないこともあり、議案は先刻送付してあるのに持参しない者が続出。ドラドラ審議は許せるにしても、議案とは無縁の、自分の家の前のドブは何時なおすんだと、突然発言するバカもいた。

ある議会の当日、例によって誰も集まらないのを咎めて、本間権平議長が私達のせいにした。日頃から腹を立てていたのはこちらだから、分を忘れて私は議長にかみついた。

「議長なら、責任を持って自分で集めろ！」

役場内が騒然とし、議長が一人の議員宅に電話をしていた。

数日後、私は伊藤町長に呼ばれ、愛情溢れる言葉でクビを言い渡された。突然銃弾に倒された無念さはあったが、頭を冷やして自分の無謀さも反省した。

日ならずして、南達漁業組合長がわが家を訪れ、丁重に私に組合に來てほしいと迎えてくださった。漁師の倅の合う職場に、私はすぐに同化した。

昭和二十六年四月、戦後の民主化を問う町会議員選挙が始まった。二十歳代の者なんか出たくても出られぬ町議選に、私は名乗りをあげた。青年団体連絡協議会の会長で、小学校時代から私に目をかけてくれた竹浪弘先輩が「立候補者の抱負を聞く会」を開いてくださった。若者たちが陰で応援してくれた。

「町は親方や権力者のモノではなく、すでに若い力と知恵を必要としている」と、懸命に訴えた。そして勝った。

当時の議員は権威の固まりみたいに見られ、金バツジは光り輝いていた。若僧の私でさえ町を歩いていると最敬礼され、役場に行くとかつての同僚さえ態度を変えた。私は何度かため息をした。

議場で私が発言すると、昔からの議員達がいつも身構えた。新任の関口議員をはじめ、稲倉石の若手議員一人が、いつも私の援護をしてくださった。

伊藤町長が連れて来た成瀬助役を、私がトコトン追い詰めるのと、能弁の町長がすぐに代わって代弁をつとめた。

私の父と同級で、私の書店奉公が決まった日に札幌で偶然合った。私達父子を生まれて初めての喫茶店に誘い、コーヒーの飲み方を教えてくれたのは佐々木孝泰議員であった。

その最古参の孝泰さんですら私の攻撃力が生意気に映ったのか、私の方に矢を射かけることもあり、本会議が紛糾して一時

休憩して協議会にしたこともあった。

議員の力の限界が次第に分かりはじめ、私は次第に無口になっていった。

当時、町のやることは山積していた。海岸道路はまだ工事中で、新制中学校も造らなければならなかった。大火後の都市計画も中途半端であり、港の整備も急がれた。

予算獲得は最も急がれることであり、土木現業所や支庁の役人が来ても、町内の料亭で議員も加わっての接待が必要であった。当初予算を組んだ直後は道庁まで陳情に出かけ、大きな予算は国会まで出かける始末であった。何回も役人接待の女性が小樽や町内から呼ばれた。

伊藤町長は敏腕であった。彼の目指す通り事は成就していった。正義漢よろしくしゃちこばってる私の青二才振りには、どう突っ張ってもピエロであった。

議員一期を終え、札幌に出ていた私は、伊藤町長の入院先を見舞った。肩で大息をしていた五期目の町長は、数日後亡くな

— 一期の検閲 —

その頃、私達初年兵はまだ一期の検閲が終わっていなかったで、いよいよ本格的な検閲に向けての教練が始まった。

演習場や気屯の野原を駆けずり廻ったが、つらい思い出はない。擲弾筒班の中本班長も斉藤上等兵も本当にいい人だったので、他の班にくらべたら大分案をしたのではないかと思う。

検閲では連隊長から、「おおむね良好なり」との講評があり、無事終了した。

— ラッパ修業兵

を命ず

突然、人事係の坂東准尉から呼び出された。私達初年兵四名に明日連隊本部へ行き、ラッパ修業兵の試験を受けるようにと命令された。将来はラッパ手か、悪くないナ。

一に衛生、二にラッパと言つて、軍隊勤務の中では一番目に楽だと、皆から思われているの

老兵の綴り方

あ、樺太国境守備隊

11

橘 義 春

がラッパ手だ。ラッパは小学校の時に、ラッパ鼓隊に入っていたので少しは経験はある。衛生兵や炊事勤務は教育を受ければ誰でもできるが、ラッパ手だけは誰でも出来るものではない。

何よりも天性がなければ駄目なのだ。どんなに努力しても素質が無ければ、ある程度よりは上達しない。名ラッパ手といわれる人は天性はもちろんだが、研究と努力、それに肺活量があつて、それがすばらしい音色となつて表現されるものである。

ラッパも、譜面どおりに吹いていたらつまらない曲になってしまう。カラオケや演歌も、自

分で研究してこぶしを入れたりする。ラッパもテクニクを使つて、聞いている人に感動を与えるような吹き方をしなくては、とても名ラッパ手とは言えない。

特に『消灯ラッパ』は『今日の勤務も無事に終わった。さあー寝るぞ』と、国に残してきた最愛の妻や、恋人に想いをよせ、静かに目を閉じれるようなムードをもつて吹かなければ、うまいラッパ手とは言えない。寝た奴が飛び起きるような吹き方をすると下手なラッパ手は「ガタラッパ」と言われ、皆からはバカにされ軽蔑の眼差しで見られる。

またラッパ手は、軍隊では特別待遇を受けているのも事実である。整列はもとより、行進のときも指揮官より常に一歩前を行進する。

天皇や皇族、軍旗に対して敬礼のときは、一般兵は銃に着剣するが、ラッパ手は着剣しなくてもよい。これは日本の軍隊では、ラッパ手だけが特別に許されていることである。

衛兵勤務のときは連隊本部前に整列し、週番司令から軍装と服装の厳重な検査を受けるが、司令から「ラッパ手は例外」と言われ、隊列から離れ検査は免除される。

ラッパ手は、衛兵勤務であっても歩哨に立たなくてよかった。真冬の雪混じりの寒風が吹き荒れ、マイナス三〇度にもなる厳冬の夜の歩哨勤務は、想像を絶する大変な勤務である。「銃に氷の花が咲く」と、歌の文句にもあるが、まさにその通りである。

軍隊内務令が改正になり食事ラッパが廃止になったので、ラッパ手は△起床△△点呼△△点呼△△点報△△点呼△△点呼△△消灯△の一日五回ラッパを吹奏するだけで、あとは仕事がない。夜ともなると巡察将校がやつて来て、兵隊に歩哨の任務や、守則などを矢継ぎ早に次々といいやな質問をしてくる。毎回、これには皆参つていた。ラッパ手にはそんな質問は一切ない。のんきなものだ。

(続く)

俳句鑑賞

お楽しみコーナー

10

話題二つ

俳句は易しくて、むずかしい詩です。実は五七五の十七音字の制約。有季、即ち季節のことは季節・季語をいれるという約束があるからです。

しかし、五七五の調べは日本人のこころにとつては馴染みのある句で、文字面も調べも歌謡や民謡などに取り入れられて、古くて新しい調べなのです。しかし山登りと同じで、そこに山があるから登ると同じように、俳句という日本古来の詩があるから挑戦するのだという心意気で、俳句を作ってみて下さい。

ここ数カ月の間に、私にとっては大変な榮譽と名譽とも言える好事に遭遇しました。

俳句朝日十月号の大特集「稲畑汀子（ホトトギス主宰）とホトトギス六十八人」の一人に推薦され選ばれたのです。ホトトギスの発行部数は二万部で、同人会員を含めると一万八千余人の俳人が投句していると言われます。毎月三百五十頁の大冊です。古平ホトトギス会の方々も毎月投句しています。越野清治さんは二句入選の常連です。

俳句朝日を手にして私は思いました。これで少し親父に近づいたかな、と。俳句朝日には五句

俳誌悠主宰 水 見 壽 男

掲載されています。

次の雪その次の雪ふりつもる 壽男

雪が単に降っている風景ではなく、さらびやかに、じつくりとしかも強く降っている様子を写生しました。そして積もるのです。

風鈴に風の近づきつつありぬ 壽男

この句は、俳句四季にも載りました。風の強弱で風鈴が鳴るという俳句は沢山見かけますが、鳴っているとも鳴らぬとも、ただ風が近づいているという状況で、風鈴の存在を示す句に仕上げました。俳句四季の編集長にお褒めをいただきました。

俳句作りの基本は写生です。絵画と同じようにデッサンが大切です。写生を勉強し、沢山の言葉を得た上で、心情の吐露、心象風景を詩型とする、そんなことも大事です。

二つ目は、NHK俳壇十月号の俳句手帳は、名句の一つとして、

狩りの犬今日伴はず 獵名残 壽男

の句が、折々の名句の一つとして採録されました。いやはや名句とはお恥かしい次第です。

編集雑記

▽せめて秋ころまでに、と考えていた仕事もさっぱり進まないうちに、大雪山から羊蹄山にも初冠雪のニュースが報道されました。積丹岳にも初雪を見る季節になり、家庭ではストーブ、もう冬か……は、ちよつと早いでしょうか。

▽暦を見ても『寒露』・『霜降』といういかにも寒そうな季節の名前が出ています。『甘露』『霜ふり』？となれば、これはまた別。

▽この間、先にもご紹介しました古平町の記録映画『青い海と緑の大地』を見た人から、「たいした面白かった。知ってるヤズもいっぱいいるナ」ということでした。▽先月の敬老会で差し上げた『思いでのアルバムをめくる』はこちらにはありません。元氣プラザの保健福祉課へ行つて下さい。

▽工藤二三雄さんから、恵比須神社の石段（窺入）とコンクリート普請（窺入）の寄進を記録した札を二枚寄贈になりました。いずれも当時の鍊建網業者となっています。たびたびありがとうございます。▼今月の『せたかむい』すっかり遅れてしまい申し訳ありません。



吉平町岬短歌会

盆に来て仏も在はすわが家よ住めぬ己れと聞かせつつ出づ
納ひ置きし佳き文鎮置き毛筆執れば記念にと呉れし歌友
偲ばるる

池田 テル

浜町に骨埋むると赴任せし夫は海のぞむ丘にねむれる
心してお題目唱ふに並ぶ孫ら先には五度唱へしと笑ふ

鈴木 時子

早朝の小雨にぬれし紫陽花の葉先に残る雫こぼれて
故郷の庭のいちじくたわわにうれて逝きにし父を見送る
やうに

田中 香苗

立葵の素枯れし莖に登りたる浜昼顔の桃色の花
昨夜降りし雨の残せる水たまり鰯雲浮く空を映せり

東 美知

川沿ひをゆく自転車の籠にとまり暫いたり塩辛トシボ
風のやうに來たりて去りし孫四人盆のさはやかな思ひ出残して

堀 典子

こそ庭にどくだみ見つけ残せしが雑草抑へはびこり匂ふ
秋の宵淋しきひとつとし未だ鳴くを聞かざり蛙を虫を

丹後 初江



吉平俳句会

秋蟬やあと幾日の命とも 斉藤 波留
踊果て夜道に風の立ち染めぬ 山口 悦子
朝霧の流るることの峡深し 越野 敏雄
土用灸据えて対岸晴れ渡るたる 大和田 絵伊
夕立ちの待たるる日々や畠ほこり 高橋 重子
一握ほどの火星や闇の秋 仲谷 比呂古
鰯雲流るる先の風強し 室谷 弘子
河口には蛙の数より竿の数 泉 清三
畦道に車止める麦の秋 外山 俊久
幾度も棹立て直し雁帰る 越野 清治
幸平 吟

人の世の果てある如く蛙のぼる
落ち蛙に鴉集まるひとどころ
のぼる蛙流れくる蛙見る人等



古平町史年表

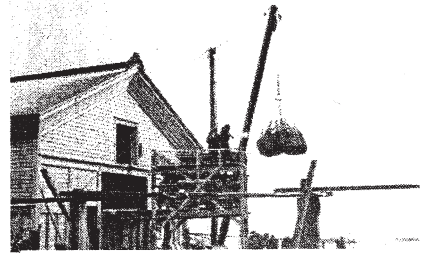
17

大正14年 ～続き～

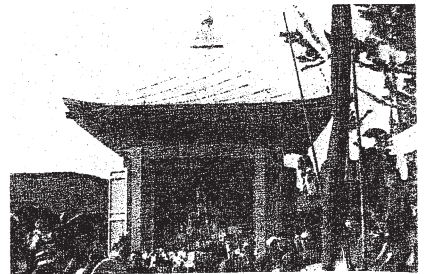
- ▲沢江村の学童と幼児が野犬毒殺用のまんじゅうを誤って食べ死亡する
- ▲後志支庁から来た技術員が桐の栽培を推奨し、以後、町内で植栽する者が増える
- ▲請願していた鉄道敷設問題が衆議院で採択になり、町では横断幕を張って祝賀する
- ▲△(罫・ウチ)仲谷漁場では、ウィンチの動力である蒸気機関を利用し、改良式蒸気粕炊き場を設備する
- ▲例年にないイワシ大漁、一隻で一日に100石(約75ト)も漁獲するところがある
- ▲フグが大漁、一日に2万尾の漁獲があり、開き干しにする
- ▲土場で競馬会が行われ、馬券も売られて人気上がる
- ▲旧学校跡地で大阪相撲の一行、60人程が興行する
- ▲松操会(未婚女性の団体)で、75歳以上の老人を招いて学校で敬老会が行われる
- ▲古平尋常高等小学校で、古平・美国・積丹三郡連合教員研修会が開かれる
- ▲丸山青峯観音堂が落成し、奉安式では稚児や参加者の行列が2百メートル余りも続いたという
- ▲造田が盛んになり、泥の木方面では灌漑溝(かんがいう)の掘削工事が盛んに行われる
- ▲第2回国勢調査が行われる。古平町の人口7,325人 第1回(延9年)より552人減少しているが、古平町の人口は明治9年から昭和20年まで7千人代で推移している

大正15年(1926)

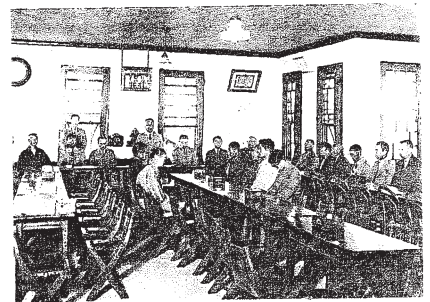
- ▲山口金治が還暦祝いに古平連合青年団に基金として200円を寄付する
- ▲積丹半島鉄道期成同盟会を『積丹半島鉄道・漁港期成同盟会』と改称し発足する。会長山口金治が留任する
- ▲町内青年団の夜学会(一夜講習会)が古平小学校で開かれる
- ▲社会教育映画会が古平小学校で開かれ満員の盛況であった
- ▲鰈刺網と曳航中の梓船が沈没し、4名が溺死するという鰈漁における最大の人身事故が起きる
- ▲古平青年団を解散し、潮陵・中央の2青年団に分立する 潮陵青年団(新地町方面)・中央青年団(浜町方面)となる
- ▲古平青年訓練所が古平小学校に併置され、開校式が行われる



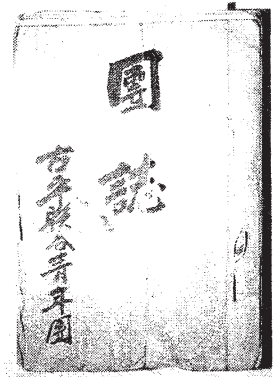
△仲谷漁場とほぼ同時期に設置された入船町の種金・種田漁場のウィンチ



丸山青峯観音観音堂の落成式



灌漑溝組合総会(古平信用組合)



古平町内の青年団を組織して連合青年団を結成